

## 成人患者における錠剤の味や服用感の必要性

山田 麻衣子<sup>1)</sup>、緒形 富雄<sup>2)</sup>、佐藤 絵馬<sup>3)</sup>、前田 守<sup>4)</sup>、長谷川 佳孝<sup>4)</sup>、  
月岡 良太<sup>4)</sup>、森澤 あずさ<sup>4)</sup>、大石 美也<sup>4)</sup>

- 1) 株式会社アインファーマシーズ アイン薬局 釧路春採店
- 2) 株式会社アインファーマシーズ アイン薬局 旭川医大店
- 3) 株式会社アインファーマシーズ
- 4) 株式会社アインホールディングス

【目的】生活習慣病等の治療では長期の服薬が必要となり、錠剤の味や服用感が患者の服薬アドヒアランスに影響する可能性も否めない。しかし、成人患者を対象としたそれらに関する調査事例は少ない。そこで、アドヒアランス向上を目的とし、成人患者における錠剤の味や服用感の必要性について調査した。

【方法】2019年12月9～20日の期間に、当社が北海道で運営する保険薬局101店舗に来局した成人患者から錠剤を服用する患者を無作為に510名抽出し、紙面によるアンケートを行った。項目は、「味・服用感から服用したくないと思った経験」「味・服用感の改善が服薬状況に影響すると思うか」「味(苦味、甘味、ミント風味)の必要性(必要を5、不要を1とした5段階評価)」「口どけの必要性(必要を5、不要を1とした5段階評価)」とした。結果は、有意水準0.05としたWelchのt検定で解析し、多重比較にはHolm法を用いた。本研究はアイングループ医療研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号:AHD-0045)。

【結果】有効回答414名のうち、57名(13.8%)に味・服用感で錠剤を服用したくないと感じた経験があり、そのうち47名(82.5%)が「味・服用感の改善が服用状況に影響する」と回答した。「味」は227名(54.8%)が不要と回答した。味別の必要性評価は「苦味(1.94±1.06、回答率69.6%)」「甘味(2.48±1.22、回答率68.8%)」「ミント風味(2.38±1.25、回答率68.6%)」よりも有意に低かった。「口溶け」の必要性評価(2.94±1.39、回答率70.3%)は、すべての「味」よりも有意に高かった

【考察】成人患者において、錠剤の「苦味」は「甘味」よりも有意に必要性が低かったが、すべての「味」は「口どけ」などの服用感よりも有意に必要性が低かった。しかし、「味・服用感で錠剤を服用したくない」と感じ、その改善が服薬状況に影響するとの回答もあった。したがって、アドヒアランスを患者別に調査して本調査結果と照合することで、味・服用感が服薬状況に影響する患者特性や薬剤特性を把握し、それぞれに合わせたアドヒアランス改善・維持に向けた対策を構築することも必要と考える。

(第53回日本薬剤師会学術大会(2020年10月,札幌)にて発表)